

# 特別支援学校に勤務する講師の学校業務への意識に関する検討

— 講師経験のある教諭への質問紙調査をととして —

冲中紀男<sup>1)</sup>・坂本 裕<sup>1)</sup>・守屋朋伸<sup>2)</sup>

## 緒 言

2010年秋、「非正規教員，7人に1人 財政難で毎年増加し10万人超」（朝日新聞，2010）との報道がなされ，我が国の教育界に大きな衝撃が走った。その内容は，文部科学省の学校基本調査において公立小・中学校における常勤講師や非常勤講師が15%を超え，教育活動の水準を維持することを危惧するものであった。しかし，特別支援学校においては常勤講師や非常勤講師が30%を超えている自治体も少なくない（文部科学省，2010）。そのため，特別支援学校においては，学校業務が集中する教諭の心的疲労が講師や非常勤講師に比べて有意に高いとの報告もなされている（坂本・一門，2011）。

このように我が国の学校教育で大きな位置を占めつつある講師や非常勤講師（以下，講師）の現状を把握し，対応を講ずることが喫緊の課題と考える。しかし，講師は任期限定採用であることもあってか，それらを対象とした研究はみあたらない。

そこで，本稿では，講師経験のある特別支援学校の教諭を対象して，講師から教諭になる際の意識の変化を尋ねた質問紙調査より，講師の学校業務への意識を明らかにする。そして，その結果を踏まえ，特別支援学校の講師を支援する際の要点に検討を加えたい。なお，G県は2006年度より特別支援学校の新規教員を50名ずつ計画採用しており，講師を経験した教諭が多数いるため，本研究の対象とした。

## 方 法

### 1 対象者

G県立特別支援学校に勤務する講師経験のある教諭のうち，勤務6年未満の者58名。

G県教育委員会では法定研修として5年を終了した教諭を対象とした6年目研修を実施しており，初任者から勤務6年未満の者を対象とした。なお，人選は所属学校長に一任した。

### 2 方法

郵送法にて依頼し，回収した。

### 3 期間

2011年7月から8月。

### 4 質問紙

①授業づくり，②子どもの理解，③保護者との関係，④校務の遂行の4点について，講師であった際との意識の変化について自由記述で回答を求めた。また，基礎情報として教諭としての勤務歴，講師としての勤務歴を確認した。

### 5 分析方法

質問誌に記載された各回答の内容をグランデッド・セオリー・アプローチの手法を参考にし，分析を行った（戈木，2006，2008，2008）。

## 結果と考察

### 1 授業づくり

授業づくりへの意識の変化として，＜意識の深まり＞，＜つながりの重視＞，＜子どもからの発想＞，＜同僚との協働＞の4つのプロパティが見いだされた。

1) 岐阜大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻

2) 岐阜大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻（岐阜県立岐阜希望が丘特別支援学校）

今回の調査において授業に関する意識の変化に関する記述が多かったが、そのことが<意識の深まり>からくるものであったと考える。「『授業が命』とよく言われるように、自分の中での見通しやねらいをしっかりと考えるようになった(講師7年, 教諭1年)」や「授業の型を固定せず、いろいろな情報を得、よりよい授業づくりを心がけるようになった(講師8年, 教諭3

年)」と回答しているように、講師経験が5年を超えた者であっても、教諭になることでその意識が大きく変化していることは着目に値するものとする。講師の多くがそれまで見聞したことのないと思われる特別支援学校の授業の意義や特性を勤務当初に伝えていねいに伝える研修なども必要と思われる。

そして、「年間の見通しに留まらず、子ども達

Table 1. 講師から教諭になることによる「授業づくり」への意識の変化

<p>&lt;意識の深まり&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『授業が命』とよく言われるように、自分の中での見通しやねらいをしっかりと考えるようになった(7・1)</li> <li>・授業づくりについてより深く考えるようになるなど、授業を流してだけでなく、様々な点において意識が深まった(4・2)</li> <li>・日々、深い教材研究の大切を感じるようになった(4・6)</li> <li>・指導計画を考えるようになり、目標や手だてなどを深く考えるようになった(4・1)</li> <li>・授業の型を固定せず、いろいろな情報を得、よりよい授業づくりを心がけるようになった(8・3)</li> <li>・授業づくりに見通しをもって、自分自身で考える責任の度合いが増した(1・6)</li> <li>・授業づくりを教諭の授業を真似たり、教諭に言われたままに行ったりしていたが、自分で考え、工夫するようになった(5・3)</li> <li>・授業ごとの目的や目標の設定をしっかりと行うなど、責任感を強く意識するようになった(1・2)</li> </ul>
<p>&lt;つながりの重視&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年間の見通しに留まらず、子ども達がどの様に社会へ出て行くのか、また、小・中・高等部の各段階において取り組むべきことについて、長期的に考えるようになった(7・1)</li> <li>・学部の位置づけや年間計画といった大きな捉えと、個々への対応の両面から授業をするようになった(8・3)</li> <li>・生活単元学習などの単元ごとのつながりを考えるようになった。(5・2)</li> <li>・計画に基づいた授業を行うようになった(5・6)</li> <li>・一時間の流れを意識するようになった(4・2)</li> </ul>
<p>&lt;子どもからの発想&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども主体の授業を考えるようになった(4・2)</li> <li>・子どもたちの生活の課題などを授業の中に組み入れていこうという意識が増した(15・3)</li> <li>・授業のねらいを明確にして、児童生徒個々の状態に応じた活動を組むようになった(7・2)</li> <li>・児童生徒の状態にあわせた授業のねらいを明確にもつようになった(6・2)</li> <li>・子ども達に題材をとおしてどのような力を育てていくのか考え、授業を考えるようになった(2・1)</li> </ul>
<p>&lt;同僚との協働&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業ごとにチームで振り返り、次の授業に活かすことが多くなった(3・5)</li> <li>・授業の活動内容を提案したり、計画したりと、自分が中心になっていかなければならないという責任が強くなった(2・1)</li> <li>・主担当として行う授業が増えたので、チームを組む同僚とよく話すようになった(5・6)</li> </ul>

\* ( ) 内は(講師勤務年数・教諭勤務年数)を示す

がどの様に社会へ出て行くのか、また、小・中・高等部の各段階において取り組むべきことについて、長期的に考えるようになった（講師7年・教諭1年）」のように卒業後の姿を思い浮かべつつ、小・中・高等部の発展性、さらに、単元の発展性、一時間の授業構成といった＜つながりの重視＞を重視することも意識の変化として示された。

また、子ども主体、本人主体が対応原理である特別支援教育の授業づくりについて、「子どもたちの生活の課題などを授業の中に組み入れて

いこうという意識が増した（講師15年・教諭3年,）」、「授業のねらいを明確にして、児童生徒個々の状態に応じた活動を組むようになった（講師7年・教諭2年,）」、「児童生徒の状態にあわせた授業のねらいを明確にもつようになった（講師6年・教諭2年,）」と講師経験が長い教諭が回答していることは、教師に採用されることにより＜子どもからの発想＞を大切にしたい授業作りへの意識に大きく影響を与えることが示唆された。

さらに、特別支援学校の学習形態として採用

Table 2. 講師から教諭になることによる「子どもの理解」への意識の変化

<p>&lt;ゆとりある関わり&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教諭になったことで自分自身の心のゆとりも出て、心底から子ども中心に、じっくりと向き合えるようになり、ややもすると強引になりがちであった子どもへの関わりが変わってきた（7・0）</li> </ul>
<p>&lt;チームでの理解&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・チームで子どもを捉え、支援していこうと考えるようになった（4・5）</li> <li>・担任、副担任での子どものことについての話し合いをこまめに行うようになった（2・0）</li> </ul>
<p>&lt;多面的な理解&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちを一面的でなく多面的に捉えようとするようになった（4・5）</li> <li>・現在の学校生活、家庭生活、地域との関わりなどの広い視点で子どもの姿を捉えることができるように努めている（5・1）</li> <li>・子どもそれぞれの地域での進路先などを詳しく知りたいと思うようになった（3・0）</li> <li>・医療や福祉とどのように連携していけばよいかを考えるようになった（6・2）</li> </ul>
<p>&lt;見通しのある理解&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一年間で終わることがないので責任感が増し、子どもの将来を考えた教育により努めるようになった（5・5）</li> <li>・子どもも育ちのより長い見通しの中で、「今」を考えるようになった（13・5）</li> <li>・継続した見方ができるようになり、将来のことを考えた教育活動ができるようになった（5・5）</li> <li>・子どもの卒業後の姿を思い描き、今、学校でやらなくてはならないことを考え、そのための取り組みについて考えるようになった（2・5）</li> <li>・将来を見据えて、今願う成長について、より深く考えるようになった（1・2）</li> </ul>
<p>&lt;より深い理解&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年間の終わりに期待する姿を目指して、生徒に接することができるようになった（3・3）</li> <li>・個別の指導計画などを活用して、より深い児童理解ができるようになった（3・4）</li> <li>・昨年の資料や個別の指導計画を見て、より子どもを理解することができるように努めるようになった。</li> <li>・1時間の授業において、何を学んでほしいかを考えるようになった（4・1）</li> <li>・子どもを場面だけでなく、生活の流れの中で捉える意識がもてるようになった（1・2）</li> </ul>

\*（ ）内は（講師勤務年数・教諭勤務年数）を示す

することが多いチーム・ティーチングをより効果的なものするため、「授業ごとにチームで振り返り、次の授業に活かすことが多くなった（講師3年・教諭5年）」との回答が示すように、教諭になることで〈同僚との協働〉を自らとらうとしている状況もみられた。こうした「つながりを重視しつつ、子どもからの発想で、同僚との協働で行う」特別支援学校の授業づくりの独自性を研修会を組まないまでも、講師にも日常の授業準備などの中で話し伝えていくような配慮も大切と考える。

## 2 子どもの理解

子どもたちの理解への意識の変化として、〈ゆとりある関わり〉、〈チームでの理解〉、〈多面的な理解〉、〈長期にわたる理解〉、〈より深い理解〉といった5つのプロパティが見いだされた。

〈ゆとりある関わり〉として、7年間の講師経験を経ての採用となった教諭が「教諭になったことで自分自身の心のゆとりも出て、心底か

ら子ども中心に、じっくりと向き合えるようになり、ややもすると強引になりがちであった子どもへの関わりが変わってきた（講師7年・初任）」と記述していた。本来はあってはならないことであるが、身分の不安定さが長期にわたることが、子どもに向き合う姿勢にも影響を与えていることを読み取れる。長期にわたる講師経験で学校に勤務することへの慣れはあろうが、それと表裏一体で生じる身分の不安定さも高まることに対する設置者や学校管理者への心的配慮も不可欠になるも考える。

また、〈チームでの理解〉については、先にも述べたが特別支援学校はチーム・ティーチングでの学習形態をとることが多く、複数の教員での子どもの理解が不可欠である。しかし、4年間の講師経験のある教諭が「(教諭になって) チームで子どもを捉え、支援していこうと考えるようになった(講師4年・教諭5年)」としている。授業づくり、子どもの理解は一連の営みであり、特別支援学校における集団思考の重要性を講師に伝えていくことも必要と思われる。

Table 3. 講師から教諭になることによる「保護者との関わり」への意識の変化

<p>〈大切さの理解〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちの様子を保護者の話をもとに、理解していくことの大切さを痛感した(1・2)</li> </ul>
<p>〈積極的な関わり〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの様子についてまめに連絡を取り合える関係になる努力の大切さを知ることができた(1・3)</li> <li>講師の時は一步退いていたところもあったが、自分から積極的に関わるようになった(2・2)</li> <li>家庭のこと、お母さんのこと、子どもへの関わりのことについて、自分から知ろうとする姿勢が強くなった(1・2)</li> </ul>
<p>〈ことばの重み〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校におけるすべての活動に説明責任があると意識するようになった。(1・3)</li> <li>保護者と関わる機会が増え、ことばの重みを感じた。(13・4)</li> <li>保護者の思いをよく考え、そのお話に十分に伺うようになった。(5・2)</li> <li>保護者の気持ちを汲みながら話を進めていくことの難しさを感じるようになった(15・2)</li> <li>保護者からの問いかけに即答せず、学校という組織を考えてから応えるようになった(8・2)</li> <li>自分できちんと調べて、事実に基づいたことを伝えようとするようになった(4・0)</li> </ul>
<p>〈内容の広がり〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>福祉制度の活用などの学校以外の生活の話もするようになった(1・3)</li> </ul>

\* ( ) 内は(講師勤務年数・教諭勤務年数)を示す

一方、＜多面的な理解＞、＜長期にわたる理解＞、＜より深い理解＞といった特別支援学校における子ども理解の根幹となるようなことを任期限定採用である講師にストレートに求めることは困難であると考え。そのため、前項の授業づくりでも述べたように、研修会を特段に組まなくとも、授業を終えた後や、個別の指導計画などを作成する過程において、それらの視点の大切さを伝えていくような配慮も大切と考える。

### 3 保護者との関わり

保護者への関わりへの意識の変化として、＜大切さの理解＞、＜積極的な関わり＞、＜ことばの重み＞＜内容の広がり＞といった4つのプロパティが見いだされた。

講師の多くは担任をすることがないため、教諭となって学級懇談や個別面談を行う中で保護者との関わりの＜大切さの理解＞が図られ、＜積極的な関わり＞や＜内容の広がり＞につながっていくものと思われる。そして更に、15年間講師を務めた教諭が「保護者の気持ちを汲みながら話を進めていくことの難しさを感じるようになった（講師15年・教諭2年）」、8年間講師を務めた教諭が「保護者からの問いかけに即答せず、学校という組織を考えてから応えるようになった（講師8年・教諭2年）」と感じたように、教諭としての＜ことばの重み＞を認識することになると思われる。

しかし、講師であっても保護者にとっては我が子の担任には変わりはなく、その関わりの

Table 4. 講師から教諭になることによる「校務の遂行」への意識の変化

<p>＜積極的な取り組み＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分がやらなければ始まらないという考えになった（10・4）</li> <li>・文書作成などにおいて、細かな部分にも責任を感じるようになった（10・1）</li> <li>・自分から意見を言ったり、自分で計画を立てたりするなど、積極的になった（1・2）</li> <li>・責任をもって取り組むこと、見通しをもって早めに動くこと、確実に仕事を引き継ぐことへの意識が高まった（1・1）</li> <li>・授業準備、分掌の仕事などの優先順位を考えて行うようになった（4・1）</li> <li>・依頼された仕事を早く行うようになった（4・1）</li> </ul>
<p>＜意識の広がり＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の学級のことだけでなく、他の学級、同僚への配慮をするようになり、自分から関わられるようになった（1・5）</li> <li>・学校として活動や行事をどのように運営していけばよいのかを考えるようになった（6・2）</li> <li>・学校行事の全体像を把握して、担当に仕事を進めるようになった（7・1）</li> <li>・学校全体の動きがわかるように、自分から積極的に関わるようになった（1・1）</li> <li>・自分が直接関わること以外のことにしても、その内容や取り組みを知りたいと思えるようになった（2・3）</li> </ul>
<p>＜同僚との連携＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・チームとしてどのように動いていくかを意識するようになった（1・3）</li> <li>・組織を円滑に動かすことを考えるようになった（7・4）</li> <li>・仕事が円滑に進むように、同僚の意見を聞くなどの働きかけをするようになった（5・5）</li> <li>・初めて担当する仕事の際には、先輩の先生に相談して取り組むようになった（2・1）</li> <li>・自分が担当した仕事の引き継ぎがよりよくいくように考えるようになった（10・4）</li> <li>・職場の雰囲気づくりや体制づくりの大切さを感じるようになった（10・4）</li> </ul>

\*（ ）内は（講師勤務年数・教諭勤務年数）を示す



<大切さの理解>は不可欠なものである。そのことの理解を深めるためにも、可能な限り、講師も個別面談などに同席し、その大切さを担任と保護者のやりとりを通して学ぶような機会も不可欠と考える。

#### 4 校務の遂行

校務の遂行に関して、<積極的な取り組み>、<意識のひろがり>、<同僚との連携>といった3つのプロパティが見いだされた。

講師は任期限定採用であるために、講師を経験した教諭が示したような<積極的な取り組み>、<意識のひろがり>、<同僚との連携>をそのまま求めることには限界があると思われる。しかし、講師が職員の30%を超えるような自治体、学校においては、教師の心的疲労への対応も考え、講師が学校校務への積極的に、更には責任をもって取り組むことができるような方策を講ずることと思われる。そのため、講師が<意識のひろがり>をもてるような情報提供や、<同僚との連携>ができるように教諭からの働きかけを工夫することとともに、校務分掌組織の細部の工夫や見直しが必要になるものと考えられる。

#### おわりに

これから10年間に、教員全体の約3分にあたる120万人弱の教員が退職し、経験の浅い教員が大量に誕生する。加えて、本稿で取り上げた自治体の財政難に伴う常勤講師や非常勤講師が大量に増加することも相まって、学校教育の教育力の低下が強く懸念されている。しかし、このような状況を新教育が創造できる好機と捉え、管理職、中堅教員、若手教員、そして、講師や非常勤講師がそれぞれの力を発揮できる学校経営のあり方について更に検討を深めていきたい。

**謝辞** 公務多忙な中、調査に協力いただいた方々にお礼を申し上げます。

#### 文献

1. 文部科学省 (2010)：平成22年度学校基本調査。

2. 戈木クレイグヒル滋子 (2006) グラウンデッド・セオリー・アプローチ。新曜社。
3. 戈木クレイグヒル滋子 (2008) 質的研究方法ゼミナー。医学書院。
4. 戈木クレイグヒル滋子 (2008) 実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ。新曜社。
5. 坂本 裕・一門恵子 (2011) 特別支援学校教員のバーンアウトに関する調査研究Ⅱ。日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 306。

#### 資料

1. 朝日新聞。2010年10月23日電子版。